

「宗門人別改帳」に見る明治初期の銀山町の様相

仲野 義文

はじめに

本稿は、明治4年に作成された石見国邇摩郡銀山町の宗門人別帳の基本史料として、当該期における銀山町の戸口に関する2, 3の問題について考察を行うものである。

銀山町の戸口に関しては、すでに江戸時代を中心に検討を行っているが¹、本稿では明治期に作成された宗門人別帳を新たな史料として加え、各時代を通じた銀山町の人口動態の特質を明らかにしたいと思う。初めに、本報告で検討する史料²について以下に簡単に紹介しておこう。

- ① 明治4年「未宗門帳」
- ② 明治4年「未宗門 休谷上下・下河原上下・清水谷」
- ③ 明治4年「大谷下組宗門人別改下帳」
- ④ 明治4年「下川原上組宗門人別改下帳」
- ⑤ 明治4年「休谷上下組宗門人別改下帳」

明治4年は宗門改帳として最後のものである。このうち①は銀山町の大谷上下・昆布山谷上下・枋畑谷上下地区のものであり、②は休谷上下・下河原上下・清水谷地区の宗門帳である。ただし、このなかには本谷地区の住民分が含まれていないため必ずしも銀山町の全住民をすべて網羅したものではない。

次に③・④・⑤について、これは①・②の宗門帳を作成するにあたって、各地区別にまとめた「下帳」である。原則的には、この下帳に載る人物は正規の宗門帳にも記載されることとなる。しかし、下帳には正規の宗門帳には見られない記載、たとえば職業、屋敷地番、実父の名前および現住所等々が記載されているため、住民の移動状況や通婚圏などについて具体的に知ることができるのである。

そこで本稿においては、従来検討した世帯や人口の問題に加えて、かかる通婚圏の問題についても宗門帳に記載されたわずかな手掛かりをもとに考えてみたいと思う。

1. 明治初期の鉱山経営

宗門改帳の検討を行うにあたり、その前提として当該期の鉱山経営について簡単に述べることにしよう。

石見銀山は江戸時代を通じて幕府の直轄地として支配を受けたが、慶応2年の幕長戦争の敗北によって同年8月からは長州藩の管理下に置かれることとなった。なお、長州藩政

下の銀山に関しては先行研究がないため詳細はわからないが、次に示す嘆願書³から概ね旧幕時代の諸施策を踏襲したようである。

長州御役人中石地江御入込御裁判被為在候ニ付御歎願筋巨細ニ奉申上候所、再三御見分御糾之上当分仮法として灰吹銀壱貫目ニ付代銀八貫目、銀絞銅壱貫目ニ付代銀七拾目ツヅニ御買上被成下、山方町方役人共始山方吹方稼人共ニ至ル迄御救米被仰付難有稼方仕居候、然ル所米穀並鉄油其外山方吹方日用之品々直段追々高価ニ相成銀銅御買上代銀而已ニ而ハ山方道中修覆等一切精出来敷内土石留木等追々朽腐道中危ク人民出入無心元、且間歩内之義ハ御見分被成下候通土石中堅三尺余横式尺位之穴数百尋罷越地気水氣之毒受候義も不厭職業仕候義ニ付道中修覆ハ丈夫ニ致置不申而ハ稼方も難相成其段先御裁判所へ又々奉歎願候所御詮義之上、去々辰年六月御仕法替被仰付灰吹銀壱貫目ニ付代銀五貫目、銅壱貫目ニ付代銀七拾貫目之御買上ニ被成下、山方道中修覆賃銀取明切延賃銀切地御手当銀、灰吹御手当銀、土石留木代銀、其外山方へ懸り候諸色代銀等ハ御直御払ニ被成下、其上銀堀共へ人別米五合、柄山負人別米三合、手子人別米貳合、銀吹師、雇入人足人別米貳合、内山方鍛冶下使人別米壱合ツヅ、毎日被仰付、尚又町方山方役人一同江ハ御心附米時々御下渡被仰付被下置、一同難有仕合奉存

長州藩でも産銀・産銅の買い上げを実施していたようであるが、この場合灰吹銀 1 貫目に代銀 8 貫目、銀絞銅 1 貫目は 7 0 目となっていた。また、銀山町住民に対しては御救米を支給したが、折からの諸物価の高騰によって経営が困窮したため、新たな仕法として産銀価格を 5 貫目に引き下げる代わりに諸手当の拡充、開発費用の公給など、藩権力による手厚い支援が実施されたのである。

さて、当該期の鉱山の経営状況を示すと第 1 表のとおりである。間歩の個体数に大きな違いがないばかりか、稼行中の間歩についてもほとんど変化が見られない。開発の停滞が著しい状況であることが見て取れる。

なお、明治 4 年分の鉱業生産量⁴は、出鉱量がそれぞれ銀鉱 1 7 5 4 貫 2 0 目、銅鉱 6 3 8 9 貫目 5 0 7 匁、鉛鉱 1 1 1 貫 1 1 4 匁で、このうち産銀量は 9 貫 1 1 7 匁 5 分、産銅量 3 8 6 貫目となっている。同年の稼山が 3 0 口であることなどから推して経営が極めて危機的な状況にあったものといえよう。ちなみに、鉱産品ではほかに荒砥石 1 5 0 貫目（砥石 3 0 貫目）の生産も見える。砥石の採掘は、鉱山稼ぎに代わる鉱山従事者の副業として行われたものと思われる。

第 1 表：間歩数の推移

	御直山	自分山			合計
		稼山	休山	小計	
慶応3年	23	27	236	263	286
慶応4年	23	27	236	263	286
明治2年	23	27	236	263	286
明治3年	23	27	236	263	286
明治4年	23	30	236	266	289

出典：慶応3年「間歩改帳」、慶応4年「間歩改帳」、慶応2年「間歩改帳」、明治3年「間歩改帳」、明治4年「間歩改帳」（高橋家文書）

2. 銀山町の世帯と人口

江戸時代における銀山町の人口と家数の推移については第2表のとおりである。元禄期を1つのピークとして次第に減少を辿る。特に幕末維新时期には著しく減少し、慶応2年8月では家数354軒、人口919人⁵であったものが、わずか5年後の明治5年7月では家数268軒、人口508人（男254人、女254人）⁶にもなっている。ただ、明治5年の場合には3月の浜田地震があったためこの影響も考慮すべきではあるが、概して明治初めには人口及び家数に顕著な減少を見て取れる。

さて、明治4年の宗門改帳について検討を行うが、①明治4年「未宗門帳」には世帯178件分、人口414人分が、②明治4年「未宗門 休谷上下・下河原上下・清水谷」には世帯119件分、人口302人分がそれぞれ記載されている。したがって、合計では世帯294件、人口716分の情報が含まれている。

まず世帯の規模についてみると第3表である⁷。銀山町の場合、世帯1人が全体の36%と最も高く、次いで3人の20%となっている。全体的には1から3人までが75%にも及んでおり、印象的には比較的小規模世帯によって構成されているといえよう。もっとも、このような特徴は明治期に限ったものではなく、すでに18世紀半ばにはこうした傾

第2表：銀山町の人口推移

年代	家数	人別		
		総計	男	女
延宝 6年	317	1564	853	711
元禄 5年	350	1871	1004	867
元文 5年	477	1467	-	-
延享 4年	341	1173	-	-
文化1 2年	461	1657	-	-
天保 9年	400	1242	627	615
文久 2年	381	1061	523	538

出典：「覚書」野沢家文書元禄6年「石雲隠覚集」阿部家旧蔵文書、「銀山覚書」龍善徳氏所蔵文書、延享4年「銀山覚書」龍善徳氏所蔵文書、「石見国銀山要集」山中家文書、天保9年「私領御巡見様御案内帳」島根県立図書館、文久2年「銀山町明細帳」高橋家文

向は見て取れる。たとえば、第4表は安永期における世帯の規模について整理したものであるが、明治期と同様に世帯1人が最も高いことがわかる。しかも、こうした特徴は、あ

第3表: 銀山町の世帯状況

人数	世帯数	割合
0	5	2%
1	107	36%
2	55	19%
3	59	20%
4	40	14%
5	17	6%
6	4	1%
7	5	2%
8		0%
9	2	1%
10	0	0%
11	0	0%
12	0	0%
合計	294	

出典：明治4年「銀山町末年宗門帳」高橋家文書

第4表: 安永期の世帯状況

人数	世帯数	割合
0	0	0%
1	50	30%
2	37	22%
3	42	25%
4	19	11%
5	7	4%
6	6	4%
7	5	3%
8	3	2%
9	0	0%
10	0	0%
11	0	0%
12	0	0%
合計	169	

出典：安永6年「宗門改帳」高橋家文書

第5-1: 大森町

人数	世帯数	割合
0	3	2%
1	23	18%
2	23	18%
3	25	19%
4	25	19%
5	12	9%
6	7	5%
7	5	4%
8	0	0%
9	3	2%
10	2	2%
11	2	2%
12	0	0%
合計	130	

出典：文久3年「禪宗宗門帳 大森町」、文久3年「浄土宗宗門帳 大森町」、文久3年「真言宗宗門帳 大森町」、文久3年「法華宗宗門帳 大森町」熊谷家文書（島根大学付属図書館）

第5-2表: 邑智郡潮村

人数	世帯数	割合
0	0	0%
1	4	8%
2	6	13%
3	7	15%
4	4	8%
5	10	21%
6	5	10%
7	5	10%
8	3	6%
9	1	2%
10	0	0%
11	1	2%
12	2	4%
合計	48	

出典：明治3年「宗門改人別書上帳」坂根家文書（島根大学付属図書館）

第5-3表: 邇摩郡忍原村

人数	世帯数	割合
0	0	0%
1	12	13%
2	29	30%
3	17	18%
4	8	8%
5	9	9%
6	12	13%
7	6	6%
8	2	2%
9	1	1%
10	0	0%
11	0	0%
12	0	0%
合計	96	

出典：文久2年「宗門帳人別増減帳」中原家文書

る種銀山町に限って見られるもので、この点を第5表によって比較してみよう。第5表は銀山町に隣接する大森町（陣屋許村）と、山間部の江の川沿いの邑智郡潮村、純粋な農村である邇摩郡忍原村の世帯規模を整理したものである。これらの3つの町・村を比較しても1人世帯の割合が銀山町の場合ほど高くないことがわかる。したがって、1人世帯が高率なのは、ひとり銀山町の特徴といえることができるであろう。

では、なぜこのような1人世帯が銀山町の場合高率なのか。これは銀山町が一般農村と比べ賃金労働の割合が高いこと、そのため周辺農村における稼ぎの場になっていたことが

考えられる。このことはこのような1人世帯の職業が、銀堀や日雇であることから裏付けられるといえよう。

次に人口についてみよう。第6表は前掲宗門改帳から世代ごとの人口について整理したものである。20代の割合が22%と高く、次いで10代の17%となっている。また、第7表は安永6年と弘化3年の状況を整理したものである。同様に10から30代の割合が高く、各時代概ね共通の傾向を示している。

さらに、忍原村、潮村、大森町の3ヶ所と比較すると、第8表である。特段の違いは指摘できないが、ただしこの3ヶ所の場合を見ると何れも10代以下が銀山町と比べ割合が高いことがわかる。これらの違いについては、農村部の場合にあっては人口が基本的には内部で再生産されるのに対して、銀山町では外部からの移入が大きく関与しているものと考えられる。実際他に比べ現役世代である20、30代の割合が高いことがこれを示しているものといえよう。このことは銀山町における人口の流動性と深く関わっているといえるまでもない。

第6表:銀山町

	男性	割合	女性	割合	合計	割合
10歳未満	36	54%	31	46%	67	9.4%
10代	64	52%	59	48%	123	17.3%
20代	92	59%	64	41%	156	22.0%
30代	50	47%	57	53%	107	15.1%
40代	59	50%	59	50%	118	16.6%
50代	31	40%	46	60%	77	10.8%
60代	25	47%	28	53%	53	7.5%
70代	0	0%	6	100%	6	0.8%
80代	1	33%	2	67%	3	0.4%
合 計	358	50%	352	50%	710	

出典:明治4年「宗門改帳」高橋家文書

第7-1表:銀山町(安永6年)

	男性	割合	女性	割合	合計	割合
10歳未満	33	57%	25	43%	58	12.8%
10代	41	50%	41	50%	82	18.1%
20代	38	48%	42	53%	80	17.7%
30代	48	52%	44	48%	92	20.3%
40代	34	50%	34	50%	68	15.0%
50代	21	60%	14	40%	35	7.7%
60代	11	50%	11	50%	22	4.9%
70代	8	53%	7	47%	15	3.3%
80代		0%	1	100%	1	0.2%
合 計	234	52%	219	48%	453	

出典:安永6年「宗門改帳」高橋家文書

第7-2表:銀山町(弘化3年)

	男性	割合	女性	割合	合計	割合
10歳未満	27	54%	23	46%	50	12.0%
10代	38	48%	42	53%	80	19.3%
20代	46	52%	43	48%	89	21.4%
30代	42	60%	28	40%	70	16.9%
40代	20	53%	18	47%	38	9.2%
50代	24	44%	30	56%	54	13.0%
60代	9	47%	10	53%	19	4.6%
70代	7	50%	7	50%	14	3.4%
80代	0	0%	1	100%	1	0.2%
合 計	213	51%	202	49%	415	

出典:弘化3年「人別宗門帳」高橋家文書

第8－1表：邇摩郡忍原村

	男性	割合	女性	割合	合計	割合
10歳未満	25	37%	42	63%	67	18.3%
10代	39	52%	36	48%	75	20.4%
20代	31	57%	23	43%	54	14.7%
30代	29	55%	24	45%	53	14.4%
40代	26	57%	20	43%	46	12.5%
50代	15	39%	23	61%	38	10.4%
60代	16	57%	12	43%	28	7.6%
70代	3	75%	1	25%	4	1.1%
80代	1	50%	1	50%	2	0.5%
合 計	185	50%	182	50%	367	

出典：明治3年「宗門改人別書上帳」坂根家文書
(島根大学付属図書館)

第8－2表：邑智郡潮村

	男性	割合	女性	割合	合計	割合
10歳未満	20	56%	16	44%	36	15.3%
10代	21	42%	29	58%	50	21.3%
20代	20	44%	25	56%	45	19.1%
30代	19	61%	12	39%	31	13.2%
40代	19	63%	11	37%	30	12.8%
50代	12	67%	6	33%	18	7.7%
60代	8	47%	9	53%	17	7.2%
70代	6	86%	1	14%	7	3.0%
80代		0%	1	100%	1	0.4%
合 計	125	53%	110	47%	235	

出典：文久2年「宗門帳人別増減帳」中原家文書

第8－3表：大森町

	男性	割合	女性	割合	合計	割合
10歳未満	40	58%	29	42%	69	15.2%
10代	42	50%	42	50%	84	18.5%
20代	43	51%	42	49%	85	18.8%
30代	35	57%	26	43%	61	13.5%
40代	29	47%	33	53%	62	13.7%
50代	26	46%	31	54%	57	12.6%
60代	10	40%	15	60%	25	5.5%
70代	3	38%	5	63%	8	1.8%
80代	0	0%	2	100%	2	0.4%
合 計	228	50%	225	50%	453	

出典：文久3年「禪宗宗門帳 大森町」、文久3年
「浄土宗宗門帳 大森町」、文久3年「真言宗宗
門帳 大森町」、文久3年「法華宗宗門帳 大森
町」熊谷家文書(島根大学付属図書館)

3. 銀山町住民の移動と通婚圏

前述のとおり明治4年「宗門改帳」には、各地区で作成された宗門人別下帳がする。ここでは下帳の分析を通じて銀山町住人の移動や通婚圏の問題について検討を行う。

はじめに史料について説明すると、明治4年「大谷下組宗門人別改下帳」が世帯33件、人別82人、明治4年「下川原上組宗門人別改下帳」世帯35件、人別92人、明治4年「休谷上下組宗門人別改下帳」世帯56件、人別139人で、合計では世帯124件、人313人である。先に検討した明治4年「宗門帳」が世帯294件、人別716人分であるから世帯では42%、人別43%の情報を補完しているものといえる。なお、本文末に下帳を整理したものを載せている。ただし、筆頭者を含む男性については多くが苗字を付されているが、ここでは苗字を除き代わりに「A1」のごとくID番号で表示した。

さて、下帳に記載されている情報は、一般的な世帯内の家族構成と年齢、宗旨と旦那寺などのほかに、屋敷の地番、借家の場合その持ち主が載せられている。特に実父や養父といった続柄に関する情報があるため、住民の移動状況や通婚について詳しくわかる。そ

こで以下に検討を行う。

まず住民の出身地についてみると第9表のとおりである。これは筆頭者を中心にみたものであるが、これによると銀山町出身者が全体の69%を占めており、次いで銀山領内の20%となっている。銀山領内では第10表のように隣接する大森町が多く、またたいていは銀山町の近隣からの移入であることがわかる。このほかにA5が備後国足田郡、A14が出雲国飯石郡、B11が尾張国のように一部国外からの移入者もあるが、これは稀な事例といえよう。

次に通婚圏について筆頭者の妻を例にみると第11表のとおりである。不詳者の数が多く、また事例数が少ないため不十分ではあるが、一応の傾向としてみておきたい。これによると、銀山町内での通婚もあるが、割合としては近隣の村落内からの移動が多い。何故このような傾向となるかは不明であるが、人の往来が頻繁な町場だけに人的な交流が比較的広範囲に及んでいたものではあるまいか。

第9表:銀山町住民の出身地

地域名	人数	割合
銀山町	86	69%
銀山領内	25	20%
銀山領外	1	1%
備後国	1	1%
安芸国	1	1%
尾張国	1	1%
不記載	9	7%
	124	100%

出典:明治4年「大谷下組宗門人別改下帳」、明治4年「下川原上組宗門人別改下帳」高橋家文書

第10表:銀山領内の出身者

村名	人数	割合
大森町	5	25%
佐摩村	1	5%
大国村	1	5%
三久須村	1	5%
西田村	1	5%
馬路村	1	5%
久利村	1	5%
鬼村	1	5%
荻原村	1	5%
大田南村	1	5%
大田北村	1	5%
郷田村	1	5%
浅利村	1	5%
大家村	1	5%
後地村	1	5%
波積北村	1	5%
	20	100%

出典:第10表に同じ

第11表:通婚圏

地域名	人数	割合
銀山町	10	29%
銀山領内	15	44%
不記載	9	26%
	34	100%

出典:第10表に同じ

おわりに

以上、明治4年に作成された宗門改帳を史料として、幕末維新期の銀山町の世帯や人口の問題を見てきた。この時期の銀山町は、かつてない鉱山経営の不況、さらに長州藩による占領状態など、政治的・経済的に混乱した時代であった。このような時代の中、銀山町では他地域への人口流出を余儀なくされたが、近代の鉱山集落のように急激にゴーストタウン化するのではなく比較的緩やかなかたちで進んでいった。このことは銀山町の住民が7割近くを占めていることで明らかのように、他の鉱山町と比べて定住性が高かったこと

によるものではあるまいか。

なお、本稿においては宗門帳のデータを数値のみの分析で終わったが、今後は鉱山の支配や生産などから数値に影響を与える背景についても明らかにしていきたいと思う。

最後に本プロジェクトにお誘いを頂いた、島根大学法文学部山陰研究センター室長廣嶋清志氏には、この場をかりて感謝申し上げたい。

注

-
- ¹ 仲野義文「江戸時代における銀山町の人口動向と社会構成について」（『宗門改帳からみる山陰の近世社会』2004-06年度 島根大学法文学部山陰研究プロジェクト 0404 「宗門改帳データベースによる出雲・石見地域の生活様式の比較研究」研究報告書）山陰宗門改帳研究会、2006年。仲野義文「石見銀山附地役人の身分と通婚、家族」（『宗門改帳からみる山陰の近世社会 その2』2004-06年度 島根大学法文学部山陰研究プロジェクト 0404 「宗門改帳データベースによる出雲・石見地域の生活様式の比較研究」研究報告書）山陰宗門改帳研究会、2007年。
 - ² 本稿で検討する明治4年宗門改帳はすべて高橋家文書である。
 - ³ 明治3年「願書写」高橋家文書。これは明治3年8月に銀山町役人一同が、明治政府から派遣された巡察師に対して提出した嘆願書の写しである。
 - ⁴ 「願書写」高橋家文書。
 - ⁵ 慶応2年「町明細書上帳」高橋家文書。家数人別の記載について貼紙下には家数325軒、人別871人とあるが、ここでは貼紙の数字を採用した。
 - ⁶ 前掲注4に同じ。
 - ⁷ 表中の世帯0は無住の寺院で、住職が他の寺院と兼務して場合である。

参考資料：明治4年銀山町の住民状況

NO	ID	所在地		筆頭者				妻		母		子								供								その他									
		番	貸し主	職業	名前	年	実父	養父	名前	年	実父	名前	年	実父	名前	年	名前	年	名前	年	名前	年	名前	年	名前	年	名前	年	名前	年	名前	年	名前	年			
1	A	1	114		町年寄	弥五郎	36	三久須村百姓儀助(三男)・亡	藤三・亡	てふ	39			みつ	50	銀山町商上野嘉左衛門四女	寅次郎	5																			
2	A	2	121		銀堀商売	為三郎	50	宗之助(銀吹日雇)・亡																													
3	A	3			山付・町組頭	徳十郎	33	清十郎(四男)	金六・亡																												
4	A	4	120	上野弥五郎地借		宗十郎	56	上野清右衛門(三男)	儀平・亡	とし	41	大森町森山栄太郎姪				たか	6																				
5	A	5	135	高橋富三郎借家	吹方日雇	弥三郎	56	備後国足田郡有地村百姓新助(長男)・亡		たい		松原勝右衛門・亡																									
6	A	6	140		銀堀	堅次	26	仙蔵(二男)・亡	利吉					りつ	59	銀堀兼三郎(二女)・亡																					
7	A	7			極楽寺	説書	44																														
8	A	8	134		銀堀	増太郎	19	藤市(長男)	貞吉・亡																						そめ(伯母)	40					
9	A	9	129		農	のよ	55	那賀郡郷田村運平(長女)・亡								良俊※弟子	24	達問※弟子	24	法顕※弟子	17											智本※尼	68	恵仁※尼	40	法私※尼	30
10	A	10	130	上野弥五郎借家	吹方日雇	源八	66	大国村定兵衛(長男)・亡		しの	67	天河内村百姓走八(長女)・																									
11	A	11			日雇	政太	40	大国村銀堀林平(長男)・亡								しゆん	6																				
12	A	12	128		吹屋日雇	和一郎	37	藤十(63才)※同居		もん	39	銀山町品川半右衛門(長女)・亡	みか	57	銀山町猶十郎(長女)・亡																						
13	A	13	119	高橋富三郎借家	吹屋日雇	万三郎	24	藤十(三男)								はま	3																				
14	A	14	124		医師	文英	44	邑智郡市山村医師山崎見英	雲州飯石郡頼原村産医師三刀舜国二男市原文教	こふ	36	大森町士宗岡佐一郎伯母				文吉	11	ひろ	15	よね	4																
15	A	15		※市原文英同居		市原友作	7	銀山町文英(二男)	文八・亡																												
16	A	16		※休谷芳太郎同居	日雇	りか	24	大森町日雇豊助・亡								加藤初太※堀藤太郎・亡	7																				
17	A	17	112	高橋富三郎地所	銀堀	勤治郎	39	銀堀春太郎・亡					なみ	60	銀堀金兵衛(三女)・亡	ひり	14																				
18	A	18	138		日雇	安太郎	19	弥太郎(長男)・亡																													
19	A	19	123	上野清十郎借家	銀堀商	萬次	24	銀堀卯蔵・亡					とく	46	下川原よし(姉)																	松村伊太郎(弟)	21	松村重太郎(弟)	9	すへ(妹)	14
20	A	20	113		銀堀商	小太郎	20	豊太(長男)・亡																									しつ(伯母)/松本小左衛門(六女)・	29			
21	A	21	136		年寄	富三郎	52			ひさ	40					高橋豊治郎	19																りき ※高橋豊治郎妻	16			
22	A	22	133			りえ	51	邇摩郡西田村百姓宗平(五女)・亡																													
23	A	23			石工	治三郎	61	那賀郡浅利村百姓佐平太(長男)・																													
24	A	24			銀堀	菊治	28	銀堀安五郎(長男)・亡																													

[illegible]

52	B	19	49	龍昌寺 借家		清吉	52	吹屋師清 吉・亡						清市	11	きく	18								はつ※清 蔵同家/ 東用田蓮 教寺檀家	18				
53	B	20				国太	32	故右衛門・																						
54	B	21				はつ	18																							
55	B	22	40	西本坊 借家		米吉	41	上佐摩村政 吉(二男)								きみ	18													
56	B	23				貞次	40	吹屋師勝次 (長男)・亡																ちえ	32	すめ	27			
57	B	24				竹市	16	銀山町柑子 谷銀堀藤吉 (長男)																ます	17					
58	B	25	60		木挽職	貞四郎	49	邇摩郡久利 村幾右衛門 (二男)・亡	徳三郎・亡	みい	31																			
59	B	26	62		木挽職	新三郎	51	嘉平太(長 男)・亡						梅市	19									勇吉※弟	19					
60	B	27	54			亀三	47	和助・亡		てん	57	下河原日 雇富助 (二女)・																		
61	B	28				辰太郎	21	万助(三男)				なを	61											すま※姉	39	ふみ※姉	31			
62	B	29	45			浅吉	40	林助・亡		ぬい	30	角平(二 女)		その	4															
63	B	30			大工	文次	61	銀堀惣之 丞・亡		ちよ	56	大森町農 房吉・亡		亀吉	25															
64	B	31				いと	21	銀堀彦市・																						
65	B	32	43			才治	43	勝蔵		しけの	42			きぬ	22	ふん	4							よし※伯 千代寿※ 姉/贅女	42					
66	B	33				せい	21	林作(59 才)																						
67	B	34	68			りせ※弥市 後家	41	和三郎・亡																						
68	B	35				孫市	4	治三郎(長 男)・亡																						
69	C	1	100		日雇	しゅん	39	愛次郎・亡																						
70	C	2			銀堀商	竹次	24	銀堀友吉 (長男)・亡																						
71	C	3	87		吹屋日雇	浅次	52	吹屋行七十 郎(二男)・ 亡		のよ	47	邑智郡吾 合村百姓 文吉(二 女)・亡		しけ	27	あそ	18													
72	C	4	104		銀堀商	久太郎	44	銀堀亀三郎 (長男)		なを	42			兵市	17															
73	C	5	86		日雇	とま	48	吹屋行房蔵 (二女)・亡																						
74	C	6			日雇	とめ	22	吹屋師彦四 郎・亡																						
75	C	7			日雇	くら	62	百姓民十郎 (長女)・亡																とみ同居						
76	C	8	110	極楽寺 借家	吹屋日雇	芳太郎	49	銀山町銀堀 彦次(三 男)・亡						善太	30	末次郎	3													
77	C	9	80	安原常 五郎借 家	工	亀三郎	52	鍛冶周平 (三男)・亡		きみ	47	迺摩郡仁 万村岩蔵 妹		鉄之祐	26	乙次郎	9	栄太郎・ 亡	5	かん	24	きよ	21	つま	19	みの	13			
78	C	10			日雇	臺三郎	23	銀堀職春十 (次男)	安五郎・亡																					
79	C	11			工	音市	29	吹屋師彦四 郎・亡																臺次郎 (弟)※日 雇	24					
80	C	12	89		大工	石賀瀬太郎	32	孫右衛門 (三男)・亡																した(姉) ※父孫右 衛門二女	43					
81	C	13			日雇	つね	23	銀堀金蔵 (三女)・亡																						
82	C	14	88		工	角太郎	30	吉助・亡				るい	47	大工孫右 衛門(長 女)・亡										徳太郎 (弟)※父 吉助二男	23	香吉(弟)	20			
83	C	15				はつよ	31	邇摩郡大家 村百姓伊左 衛門(長女)						萬太郎※ 銀堀房二 郎(長男)	4															
84	C	16				松造	25	銀堀金蔵 (三男)・亡	菊太・亡																					
85	C	17				すて	8	銀堀口四郎 (長女)・亡																本谷みと 同居						

[illegible]

